

俘囚

海野十三

青空文庫

「ねエ、すこし外へ出てみない！」

「うん。——」

あたしたちは、すこし飲みすぎたようだ。ステップが跟々よろよろと崩れて、ちつとも鮮あざやかに極きまらない。松永まつながの肩に首を載のせている——というよりも、彼の逞たくましい頸くびに両手を廻して、シツカリ抱きついているのだった。火のように熱い自分の息が、彼の真赤な耳みみ朶みたぼにぶつかっては、逆にあたしの頬を叩く。

ヒヤリとした空気が、襟えりくび首のあたりに触ふれた。気がついてみると、もう屋上に出ていた。あたりは真暗まっくら。——唯ただ、足の下がキラキラ光っている。水が打つてあるらしい。

「さあ、ベンチだよ。お掛け……」

彼は、ぐにやりとしているあたしの身体を、ベンチの背中に凭もたせかけた。ああ、冷い木の床ゆか。いい気持だ。あたしは頭をガクンとうしろに垂たれた。なにやら足りないものが感ぜられる。あたしは口をパクパクと開あけてみせた。

「なんだネ」と彼が云った。変な角度からその声が聞えた。

「逃げちやいやーよ。……タバコ！」

「あ、タバコかい」

親切な彼は、火の点ついた新しいやつを、あたしの唇の間に挟はさんでくれた。吸おつては、吸おう。美味おいしい。ほんとに、美味おいしい。

「おい、大丈夫かい」松永はいつの間にか、あたしの傍そばにピツタ

りと身体をつけていた。

「大丈夫よオ。これツくらい……」

「もう十一時に間もないよ。今夜は早く帰った方がいいんだがなア、奥さん」

「よしてよ！」あたしは呶鳴りつけてやった。「莫迦ばかにしている

わ、奥さんなんて」

「いくら冷血れいけつの博士はかせだって、こう毎晩続けて奥さんが遅くつちや、きつと感づくよ」

「もう感づいているわよオ、感づいちや悪い？」

「勿論、よかないよ。しかし僕は懼おそれるとは云やしない」

「へん、どうだか。——懼おそれていますって声よ」

「とにかく、博士を怒らせることはよくないと思うよ。事を荒立あらだてちゃ損だ。平和工作を十分に置いて、その下で吾々われわれは楽しい時間を送りたいんだ。今夜あたり早く帰って、博士の首くびに君のその白い腕を捲まきつけるといいんだがナ」

彼の云っている言葉の中には、確かにあたしの夫への恐怖うかがが窺うかがわれる。青年松永は子供だ。そして偶像崇拜家ぐうぞうすうはいかだ。あたしの夫が、博士であり、そして十何年もこの方、研究室に閉じ籠こもって研究ばかりしているところところに一方ならぬ圧力を感じているのだ。博士がなんだい。あたしから見れば、夫なんて紙人形かみにんぎょうに等しいお馬鹿さんだ。お馬鹿さんでなければ、あんなに昼となく夜となく、研究室で屍体しかいばかりをいじって暮せるものではない。その癖くせ、こ

の三四年こつち、夫は私の肉体に指一本触つた事がないのだ。

あたしは、前から持っていた心配を、此処ここにまた苦にがく思い出さねばならなかつた。

(この調子で行くと、この青年は屹度きつと、私から離れてゆこうとするに違いない！)

きつと離れてゆくだろう。ああ、それこそ大変だ。そうなつては、あたしは生きてゆく力を失つてしまふだろう。松永無くして、私の生活がなんの一日だつてあるものか。——こうなつては、最後の切り札を投げるより外ほかに途みちがない。おお、その最後の切り札！

「ねえ。——」とあたしは彼の身体をひつぱつた。「ちよいと耳

をお貸しよ」

「？」

「あたしがこれから云うことを聴いて、大きな声を出しちやいやアよ」

彼は怪訝けげんな顔をして、あたしの方に耳をさしだした。

「いいこと！——」グツと声を落として、彼の耳の穴に吹きこんだ。「あんたのために、あたし、今夜うちの人を殺してしまうわよ！」

「えッ？」

これを聴いた松永は、あたしの腕の中に、ピンと四肢を強直させた。なんて意気いき地ぢなしなんだろう、二十七にもなっている癖

に……。

邸内ていないは、底知れぬ闇の中に沈んでいた。

(お詔あつらえ向きだわ!) 今宵こんやは夜もすがら月が無い。

トントンと、長い廊下の上に、あたしの蹠あしおと音がイヤに高く響

く。薄ぐらい廊下灯ろうかあかりが、蜘蛛くもの巣すだらけの天井てんじょうに、ポツツ

り点ちいている。その角を直角に右に曲る。——プーンと、きつい

薬剂やくざいの匂においが流れて来た。夫の実験室は、もうすぐ其所そこだ。

夫の部屋の前に立って、あたしは、コツコツと扉ドアを叩いた。――

――返事はない。

無くても構かまわない。ハンドルをぎゅつと廻すと、扉は苦もなく

開いた。夫は、あたしの訪問することなどを、全然予期してないのだ。だから扉とびら々には、鍵もなにも掛っていない。あたしは、アルコール漬づけの標本ひょうほん壇の並ぶ柵たなの間をすりぬけて、ズンズン奥へ入っていった。

一番奥の解剖室かいぼうしつの中で、ガチャリと金属の器具が触れ合う音がした。ああ、解剖室！ それは、あたしの一番苦手にがての部屋であつたけれど……。

ドア扉を開けてみると、一段と低くなつた解剖室の土間に、果して夫の姿を見出した。

解剖台の上に、半身を前屈まえかがみにして、屍体をいじりまわしていた夫は、ハツと面おもてをあげた。白い手術帽と、大きいマスクの間

から、ギョロとした眼だけが見える。困惑こんわくの目の色がだんだんと憤怒ふんぬの光を帯びてきた。だが、今夜はそんなことで駭おどろくようなあたしじゃない。

「裏庭で、変な呻うなり声がありますのよ。そしてなんだかチカチカ光り物が見えますわ。気味が悪くて、寝られませんの。ちよつと見て下さらない」

「う、うーッ」と夫は獣けもののように呻った。「くツ、下らないことを云うな。そんなことア無い」

「いえ本当でございますよ。あれは屹度きつと、あの空井戸からいどからでございますわ。あなたがお悪いんですわ。由緒ゆいしよある井戸をあんな風にお使いになつたりして……」

空井戸というのは、奥庭にある。古い由緒も、非常識な夫の手にかかつては、解剖のあとの脣骨くずぼねなどを抛なげこんで置く地中の脣箱にしか過ぎなかった。底はウンと深かったので、ちよつとやそつと脣を抛なげこんでも、一向に底が浮き上つてこなかった。

「だツ黙れ。……明日になったら、見てやる」

「明日では困ります。只今、ちよつとお探りなすつて下さいませんか。さもないと、あたくしはこれから警察に参り、あの井戸まいで出張して頂いただくようにお願いいたしますわ」

「待ちなさい」と夫の声こゑが慄ふるえた。「見てやらないとは云わない。……さあ、案内しろ」

夫は腹立たしげに、メスを解剖台の上へ抛ほうりだした。屍体の上

には、さも大事そうに、防水布ぼうすいふをスポリと被かぶせて、始めて台の傍を離れた。

夫は棚から太い懐中電灯を取って、スタスタと出ていった。あたしは十歩ほど離れて、後に随したがった。夫の手術着の肩のあたりは、醜かくばく角張かくばつて、なんとも云えないうそ寒い後姿だった。歩むたびに、ヒヨコンヒヨコンと、なにかに引懸ひっかかるような足つきが、まるで人造人間じんぞうにんげんの歩いているところと変らない。

あたしは夫の醜しゆうく軀くを、背後うしろからドンと突き飛ばしたい衝動にさえ駆られた。そのときの異様な感じは、それから後、しばしばあたしの胸よみがえに蘇よみがえつてきて、そのたびに気持が悪くなった。だが何故それが気持を悪くさせるのかについて、そのときはまだハツキ

り知らなかったのである。後になつて、その謎が一瞬間に解けたとき、あたしは言語に絶する驚愕きょうがくと悲嘆とに暮れなければならなかった。訳はおいおい判つてくるだろうから、此処ここには云わない。

森閑しんかんとした裏庭に下りると、夫は懐中電灯をパツと点じた。

その光りが、庭石や生えのびた草叢くさむらを白く照して、まるで風景写真の陰画いんがを透すかしてみたときのようなだった。あたしたちは無言のまま、雑草を掻かき分けて進んだ。

「何にも居ないじゃないか」と夫は低くつぶや呟いた。

「居ないことはございませんわ。あの井戸の辺でございますよ」「居ないものは居ない。お前の臆病から起つた錯覚さつかくだ！ どこ

に光っている。どこに呻っている。……」

「呀あッ！ あなた、変でございますよ」

「ナニ？」

「ごらん遊ばせ。井戸の蓋ふたが……」

「井戸の蓋？ おお、井戸の蓋が開いている。どツどうしたんだろう」

井戸の蓋というのは、重い鉄蓋だった。直径が一メートル強きょうもあって、非常に重かった。そしてその上には、楕だえんけい円形の穴が明いていた。十五纏センチに二十纏だから、円に近い。

夫は秘密の井戸の方へ、ソロリソロリと歩みよった。判らぬように、ソツと内部を覗のぞいてみるつもりだろう。腰が半分以上も、

浮きたった。夫の注意力は、すっかり穴の中に注そそがれている。すぐ後にいるあたしにも気がつかない。機会チャンス！

「ええいッ！」

ドーンと夫の腰をついた。不意を喰らって、

「なッ何をする、魚子うわこ！」

と、夫は始めてあたしの害がいしん心に気がついた。しかし、そういう叫び声の終るか終らないうちに、彼の姿は地上から消えた。深い空井戸の中に転落していったのだ。懐中電灯だけが彼の手を離れ、もんどり打って草叢あぶらに顎をぶっつけた。

（やつつけた！）と、あたしは俄にわかに頭がハッキリするのを覚えた。（だが、それで安心出来るだろうか）

「とうとう、やったネ」

別な声が、背後うしろから近づいた。松永の声だと判っていたが、ギクンとした。

「ちよつと手を貸してよ」

あたしは、拾つてきた懐中電灯で、足許あしもとに転がっている沢たくあ庵石んいしの倍ほどもある大きな石を照した。

「どうするのさ」

「こつちへ転がして……」とゴロリと動かして、「ああ、もういいわよ」——あとは独りでやった。

「ウーンと、しょ！」

「奥さん、それはお止しなさい」と彼は慌あわてて停めたけれど、

「ウーンと、しよ！」

大きな石は、ゴロゴロ転がりだした。そして勢い凄じく、井戸の中に落ちていった。夫への最後の贈物だ。——ちよつと間を置いて、何とも名状めいじようできないような叫喚きようかんが、地の底から響いてきた。

松永は、あたしの傍にガタガタふる慄えていた。

「さア、もう一度ウインチを使つて、蓋をして頂戴よオ」

ギチギチとウインチの鎖くさりが軋きしんで、井戸の上には、元のように、重い鉄蓋が載せられた。

「ちよつとその孔あなから、下を覗のぞいて見てくれない」

鉄蓋の上には楕円形だえんけいの覗き穴が明いていた。縦が二十センチ

横が十五センチほどの穴である。

「飛んでもない……」

松永は駭おどろいて尻しりこ込みをした。

夜の闇が、このまま何時いつまでも、続いているとよかった。この柔しとねい褥しとねの上に、彼と二人だけの世界が、世間の眼から永遠に置き忘られているとよかった。しかし用ようしや捨すなく、白い暁がカーテンを通して入ってきた。

「じゃ、ちよつと行つて来るからネ」

松永は、実直な銀行員だった。永遠の幸福を思えば、彼を素直に勤め先へ離してやるより外はない。

「じゃ、いつてらつしやい。夕方には、早く帰ってくるのよ」

彼は膨はれぼつたい眼を気にしながら出ていった。

使用人の居ないこの広い邸宅は、まるで化物屋敷のように、静まりかえっていた。一週に一度は、派出婦がやって来て、食料品おぎなを補ったり、洗い物を受けとったりして行くのが例だった。いつまで寝ていようと、もう氣儘きまま一杯にできる身の上になった。呼びつけては、氣短かに用事を怒鳴どなりつける夫も居なくなつた。だからいつまでもベッドの上に睡っていればよかつたのであるが、どういふものか落付いて寝ていられなかつた。

あたしは、ちぐはぐな氣持で、とうとうベッドから起き出でた。着物を着かえて鏡に向つた。蒼白い顔、血走つた眼、カサカサに乾いた唇――

（お前は、夫殺しをした！）

あたしは、云わでもの言葉を、鏡の中の顔に投げつけた。おお、殺人者！ あたしは取返しのない事をしてしまったのだ。窓の向うに見える井戸の中に、夫の肉体は崩れてゆくだろう。彼にはもう二度と、この土の上に立ち上る力は無くなってしまったのだ。鉛筆の芯が折れたように、彼の生活はプツリと切断してしまったのだ。彼の研究も、かれの家族も（あたし独りがその家族だった）それから彼の財産も、すべて夫の手を離れてしまった。彼は今日まで、すっかり無駄働きをしたようなものだ。そんなことをさせたのは、一体誰の罪だ。殺したのは、あたしだ。しかし殺させるように導いたのは夫自身だったじゃないか。他の男のどこ

ろへ嫁いでいれば、人殺しなどをせず済んだにちがいない。あ
 たしの不運が人殺しをさせたのだ。といって人殺しをしたのは此
 の手である。この鏡に写っている女である。もう拭いても拭い切
 れない。あたしの肉体には、夫殺しの文字が大きな痣になつてい
 るのに違いない。誰がそれを見付けないでいるものか。じわりじ
 わりと司直しちよくの手が、あたしの膚はだに迫ってくるのが感じられる。
 (ああ、こんな厭いやな気持になるのだったら、夫を殺すのではなか
 った！)

押しよせてくる不安に、あたしはもう堪たえられなくなつた。な
 にか救すくいの手を伸べてくれるものは無いか。

「そうだ、有る有る。お金だ。夫の残していった金だ。それを探

そう！」

いつか夫が、莫大ばくだいな紙幣さつの札を数えているところへ、入つて
いったことがあつた。あれは五年ほど前のことだったが、研究に
使つたとしても、まだ相当残つている筈はず。それを見つけて、あと
はしたいことを今夜からでもするのだ。

あたしは、それから夕方までを、故なき夫の隠匿いんとくしている財産
探しに費ついやした。茶の間から始まつて、寢室から、書齋の本箱、机
の抽斗ひきだしそれから洋服筆筒ようふくだんすの中まで、すっかり調べてみた。そ
の結果は、云うまでもなく大失敗だつた。あれほど有ると思つた
金が、五十円と纏まとつていなかつた。この上は、夫の解剖室に入つ
て屍体の腹腔ふくこうまでを調べてみなければならなかつたが、あの部

屋だけは全く手を出す勇氣がない。しかしそれほどまでにせずとも、これ以上探しても無駄であることが判った。それは数冊の貯金帖を発見したことだったが、その帖面の現在高は、云いあわせたように、いずれも一円以下の小額だった。結局わが夫の懐工合は、非常に悪いことが判った。意外ではあるが、事実だから仕方がない。

失望のあまり、今度はブーツとした。この上は、化物屋敷と広い土地とを手離すより外に途がない。松永が来たらば、適当のとき、それを相談しようと思つた。彼はもう間もなく訪れて来るおとすに違いない。あたしはまた鏡に向つて、髪かたちを整えた。ととの

だが、調子の悪いときには、悪いことが無制限に続くものであ

る。というのは、松永はいつまで待っても訪ねてこなかった。もう三十分、もう一時間と待っているうちに、とうとう何時の間にやら、十二時の時計が鳴りひびいた。そして日附が一つ新しくなった。

(やっぱり、そうだ！——松永はあたしのところから、永遠に遁^にげてしまったのだ！)

彼のために、思い切つてやった仕事が、あの子供っぽい青年の胸に、恐怖を植えつけたのに違いない。人殺しの押かけ女房の許から逃げだしたのだ。もう会えないかも知れない、あの可愛い男に……。

悶^{もだ}えに満ちた夜は、やがて明け放たれた。憎らしいほどの上天

氣だった。だが、内に閉じ籠っているあたしの気持は、腹立たしくなるばかりだった。幾回となく発作ほっさが起つて、あたしは獣けもののように叫びながら、灰色に汚れた壁に、われとわが身体をうちつけた。あまりの孤独、消しきれない罪惡ざいあく、迫りくる恐怖きょうふ戦慄、——その苦悶くもんのために気が変になりそうだ、恐ろしかった。あの重い鉄蓋が持ち上がるものだったら、あたしは殺した夫の跡を追つて、井戸の中に飛びこんだかも知れない。

喚わめき、悶あばえ、暴あばれていゝうちに、とうとう身体の方が疲れ切つて、あたしはベッドの上に身を投げだした。睡つたことは睡つたが、恐ろしい夢を、幾度となく次から次へと見た。——不ふ図と、その白昼夢はくちゆうむから、パツタリ目醒めざめた。オヤオヤ睡つたようだと、

気がついたとき、庭の方の硝子窓が、コツコツと叩かれるので、其の方へ顔を向けた。

「ああ、——」あたしは、思わず大声をあげると、その場に飛んで起きた。なぜなら、庭に向いた窓の向うから、しきりに此方こつちを覗きこんでいる者があつた。その円い顔——紛れまぎもなく、逃げたとばかり思っていた松永の笑顔だつた。

「マーさん、お這入り——」

「どうして昨夜は来なかつたのさア」

嬉しくもあつたけれど、相当口惜しくもあつたので、あたしはそのことを先まず訊たずねた。

「昨夜は心配させたネ。でもどうしても来られなかつたのだ、エ

ライことが起つてネ」

「エライことツて、若い女のひとと飯ままごと事ことをすることなの」

「そツそんな呑のん気きなことじゃないよ。僕は昨夜、警視庁に留められていたんだ。そして、いまから三十分ほど前に、釈しやく放ほうになつたばかりだよ」

「ああ、警視庁なの！」

あたしはハツと思つた。そんなに早く露ろ見けんしたのかなア。

「そうだ、災難に類する事件なんだがネ」と彼は急に興奮の色を浮べて云つた。「実はうちの銀行の金庫室から、真夜中に沢山の現金を奪つて逃げた奴があるんだ。そいつが判らない。その部屋あおやまきんのしんにいる青山金之進あおやまきんのしんという番人が殺されちまつた。——そして不

思議なことに、その部屋に入るべきあらゆる入口が、完全に閉じられていたのだ。穴といえば、その室^{へや}にある送風機の入口と、壁の欄間^{らんま}にある空気窓だけだ。空気窓の方は、嵌^はめこんだ鉄の棒がなかなかとれないから大丈夫。もう一つの送風機の穴は、蓋があつて、これが外^{はず}せないことはないが、なにしろ二十センチそこそこの円^{まる}形^{がた}で、外は同じ位の大きさの鉄管で続いている。二十センチほどの直径のことだから、どんなに油^{あぶら}汗^{あせ}を流してみても、身体が通りやしない。それなのに犯人の入った証拠は、歴^{れき}然^{ぜん}としていたのだ。こんな奇妙なことがあるだろうか」

「現金は沢山盗まれたの？」

「うん、三万円ばかりさ。——こんな可笑^{おか}しなことはないという

ので、記事は禁止で、われわれ行員が全部疑われていたんだ。僕もお蔭で禁^{きん}足^{そく}を喰^{くら}ったばかりか、とうとう一泊させられてしまった。ひどい目に遭^あったよ」

松永は、ポケットの中から、一本の煙草を出して、うまそうに吸った。

「変な事件ネ」

「全く変だ。探偵でなくとも、あの現場の光景は考えさせられるよ。入口のない部屋で、白昼のうちに巨額の金が盗まれたり、人が殺されたりしている」

「その番人は、どんな風に殺されているんでしょ」

「胸から腹へかけて、長く続いた細いメスの跡がある、それが変

な風に灼やけている。一見古疵ふるきずのようだが、古疵ではない」

「まア、——どうしたんでしようネ」

「ところが解剖の結果、もつとエライことが判つたんだよ。駭おどろくべきことは、その奇妙な古疵よりも、むしろその疵の下にあつたというわけは、腹を裂いてみると、駭くじやあないか、あの番人の肺臓もなければ、心臓も胃袋も腸も無い。臓器という臓器が、すっかり紛失していたのだ。そんな意外なことが又とあるだろうか」

「まア、——」とあたしは云つたものの、変な感じがした。あたしはそこで当然思ひ出すべきものを思ひ出して、ゾツとしたのだ。

「しかし、その奇妙な臓器紛失が、検けんそく束されていた僕たち社員

を救つてくれることになった、僕たちが手を下したものでないことが、その奇妙な犯罪から、逆に証明されたのだ」

「とうとうと……」

「つまり、人間の這入るべき入口の無い金庫室に忍びこんだ奴が、三万円を奪つた揚句、^{あげく}番人の臓器まで盗んで行つたに違いないということになったのさ。無論、どっちを先にやったのかは知らないが……」

「思い切つた結論じゃないの。そんなこと、有り得るかしら」

「なんとかかう名探偵が、その結論を出したのだ。捜査課の連中も、それを取つた。^{もつと}尤も結論が出たつて、事件は急には解けまいと思ふけれどネ。ああ併し、^{しか}恐ろしいことをやる人間が有るもの

だ」

「もう止しましょう、そんな話は……。あんたがあたしのところへ帰って来てくれれば、外に云うことはないわ。……縁起直しえんぎなおに、いま古い葡萄酒でも持つてくるわ」

あたしたちは、それから口あたりのいい洋酒の盃を重ねていった。お酒の力が、一切の暗い気持を追おいはら払つてくれた。全く有難いと思った。——そしてまだ宵よいのうちだったけれど、あたしたちはカーテンを下ろして、寝ることにした。

その夜は、すっかり熟睡した。松永が帰って来た安心と、連日の疲労とが、お酒の力で和やわらかに溶け合い、あたしを泥のように熟睡させたのだった。……

——翌朝、氣のついたときは、もうすっかり明け放たれていた。よく睡つたものだ。あたしは全身的に、元氣を恢復した。

「オヤ、——」

隣に並んで寝ていたと思つた松永の姿が、ベッドの上にも、それから室内にも見えない。

庭でも散歩しているのじやないかと思つて、暫く待つていたけれど、一向彼のあしおと蹠音はしなかつた。

「もう出掛けたのかしら……」今日は休むといつていたのに、と思ひながら卓テーブル子の上を見ると、そこに見慣れない四角い封筒が載つているのを発見した。あたしはハツと胸を衝つかれたように感じた。

しかし手をのばして、その置き手紙を開くまでは、それほどまで大きい驚愕が隠されているとは気がつかなかった。ああ、あの置き手紙！ それは松永の筆蹟に違いなかつたけれど、その走り書きのペンの跡は地震計の針のように震え、ふる やつと次のような文面を判読することが出来たほどだった。

「愛する魚子よ、——

僕は神に見捨てられてしまった。かけがえのない大きな幸福を、棒に振ってしまわなければならなくなった。魚子よ、僕はもう再び君の前に、姿を現わすことが出来なくなった。ああ、その訳は……？

魚子よ、君は用心しなければいけない。あの銀行の金庫を襲つ

た不思議の犯人は、世にも恐ろしい奴だ。彼奴の真まの目標は、ひよつとすると、此の僕にあつたのではないかと考える。僕は……僕は今や真実を書き残して、愛する君に伝える。——僕は夜のうちに、あの隆りゅうりゅう々たる鼻と、キリリと引締つていた唇と（自分のものを褒めることを啜わらわないで呉れ、これが本当に褒め納おさめなのだから）——僕はその鼻と唇とを失つてしまった。夜中に不図ふと眼が醒さめて、なんとなく変な気持なので、起き出したところ、僕は君の化粧台の鏡の中に、世にも醜い男の姿を発見したのだ！これ以上は、書くことを許して呉れ。

そして最後に一言祈る。君の身体の上に、僕の遭つたような危害の加えざらんことを。

松永哲夫まつながてつお「

この手紙を読み終つて、あたしは悲歎ひたんに暮れた。なんと**非**ひ道どいことをする悪漢だろう。銀行の金を盗み、番人を殺した上に、松永の美しい顔面を惨むじたらしく破壊して逃げるとは！

一体、そんなことをする悪漢は、何奴なにやつだろうか。手紙の中には、犯人は松永を目標とする者だと思つと、書いてあつた。松永は何をしたというのだ？

「ああ、やつぱりあれだろうか？　そうかも知れない。……イヤ、イヤ、そんなことは無い。夫はもう、死んでいるのだ。そんなことが出来よう筈がない」

そのときあたしは、不図床ふとゆかの上に、異様な物体を発見した。ベ

ツドから滑り下りて、その傍へよつて、よくよく見た。それは茶褐色の灰の固まりかただった。灰の固まり——それは確かに見覚えのあるものだった。夫がいつも愛用した独逸製ドイツせいの半練り煙草の吸すい殻がらに違いなかった。

そんな吸い殻が、昨日も一昨日も掃除をしたこの部屋に、残っているというのが可笑おかしかった。誰か、昨夜ゆうべのうちに、ここへ入つて来て、煙草を吸い、その吸い殻を床の上に落としていったと考えるより外に途がなかった。そして松永が、そんな種類の煙草を吸わぬことは、きわめて明あきらかなことだった。

「すると、若もしや死んだ筈の夫が……」

あたしは急に目の前が暗くなつたのを感じた。ああ、そんな恐

ろしいことがあるだろうか。井戸の中へ突き墜とし、大きな石塊いを頭の上へ落としてやったのに……。

そのとき、入口の扉ドアについている真鍮製しんちゆうせいのハンドルが、独りでクルクルと廻りだした。ガチャリと鍵の音がした。

(誰だろうか?) もうあたしは、立っているに堪たえられなかった。

——扉は、静かに開く。だんだん開いて、やがて其の向うから、人の姿が現れた。それは紛まぎれもなく夫の姿だった。たしかに此の手で殺した筈の、あの夫の姿だった。幽霊だろうか、それとも本物だろうか。

あたしの喉から、自然に叫び声が飛び出した。——夫の姿は、無言の儘まま、静かにこつちへ進んでくる。よく見ると、右手には愛

蔵の古ぼけたパイプを持ち、左手には手術器械の入った大きな鞆かばんをぶら下げて……。あたしは、極度の恐怖に襲われた。ああ彼は、一体何をしようというのだろうか？

夫は卓テーブル子の上へドサリと鞆を置いた。ピーンと錠じょうをあけると、鞆が崩れて、ピカピカする手術器械が現れた。

「なツなにをするのです？」

「……」

夫はよく光る大きなメスを取り上げた。そしてジリジリと、あたしの身体に迫ってくるのだった。メスの尖端せんたんが、鼻の先に伸びてきた。

「アレーツ。誰か来て下さあい！」

「イツヒツヒツヒツ」

と、夫は始めて声を出した。気持ちがよくてたまらないという笑いだつた。

「呀あッ。——」

白いものが、夫の手から飛んで来て、あたしの鼻孔びこうを塞ふさいだ。

——きつい香かりだ。と、その儘まま、あたしは気が遠くなつた。

その次、気がついてみると、あたしはベッドのある居間とは違つて、真ま暗くらな場所に、なんだか蓆むしろのような上に寝かされていた。背中が痛い。裸に引き剥かれているらしい。起きあがろうと思つて、身体を動かしかけて、身体の変な調子にハツとした。

「あッ、腕が利かない！」

どうしたのかと思つてよく見ると、これは利かないのも道理、あたしの左右の腕は、肩の下からブツツリ切断されていた。腕なし女！

「ふツふツふツふツ」片隅から、厭いやな忍しのび笑いが聞えてきた。

「どうだ、身体の具合は？」

あッ、夫の声だ。ああ、それで解つた。さつき気が遠くなつてから、この両腕が夫の手で切断されてしまったのだ。憎んでも憎み足りない其の復讐ふくしゅう心！

「起きたらしいが、一つ立たせてやろうか」夫はそういうなり、あたしの腋わきの下に、冷い両手を入れた。持ち上げられたが、腰か

ら下がイヤに軽い。フワリと立つことが出来たが、それは胴だけの高さだった。大腿部だいたいぶから下が切断されている！

「な、なんとという惨むごたらしいことをする悪魔！ どこもかも、切っちゃまって……」

「切っちゃまって、痛味いたみは感じないようにしてあげてあるよ」

「痛みが無くても、腕も脚も切ってしまったのネ。ひどいひと！

悪魔！ 畜生！」

「切ったところもあるが、殖ふえているところもあるぜ。ひッひッひッ」

殖えたところ？ 夫の不思議な言葉に、あたしはまた身みぶる慄いをした。あたしをどうするつもりだろう。

「いま見せてやる。ホラ、この鏡で、お前の顔をよく見ろ！」

パツと懐中電灯が、顔の正面から、照りつけた。そしてその前に差し出された鏡の中。——あたしは、その中に、見るべからざるものを見てしまった。

「イヤ、イヤ、イヤ、よして下さい。鏡を向うへやつて……」

「ふツふツふツ。気に入ったと見えるネ。顔の真中に殖えたもう一つの鼻は、そりやあの男のだよ。それから、よろいど鎧戸のようにな

った二重の唇は、それもあの男のだよ。みんなお前の好きなものばかりだ。お礼を云ってもらいたいものだナ、ひツひツひツ」

「どうして殺さないんです。殺された方がましだ。……サア殺して！」

「待て待て。そうムザムザ殺すわけにはゆかないよ。さア、もつと横に寝ているのだ。いま流動食を飲ませてやるぞ。これからは、三度三度、おれが手をとって食事をさせてやる」

「誰が飲むもんですか」

「飲まなきや、じょうかんちよう滋養浣腸をしよう。注射でもいいが」

「ひと思いに殺して下さい」

「どうして、どうして。おれはこれから、お前を教育しなければならぬのだ。さア、横になったところで、一つの楽しみを教えてやろう。そこに一つの穴が明いている。それから下をのぞ覗いてみるがいい」

覗き穴——と聞いて、あたしは頭で、それを急いで探した。あ

あ、有った、有った。腕時計ほどの穴だ。身体を芋虫のよう
ねらせて、その穴に眼をつけた。下には卓^{テーブル}子などが見える。夫
の研究室なのだ。

「なにか見えるかい」

云われてあたしは小さい穴を、いろいろな角度から覗いてみた。
あつた、あつた。夫の見るというものが。椅子の一つに縛りつ
けられている化物のような顔を持った男の姿！ 着ているものを
一見して、それと判る人の姿——ああ、なんと変わり果てた松永
青年！ あたしの胸にはムラムラと反抗心が湧きあがった。

「あたしは、あなたの計画を遂げさせません。もうこの穴から、
下を覗きませんよ。下を見ないでいれば、あなたの計画は半分以

上、効果を失ってしまいました」

「はッはッはッ、莫迦ばかな女よ」と、夫は、暗がりの中で笑った。

「おれの計画しているものはそんなことじゃない。見ようと見ま
いと、そのうちにハッキリ、お前はそれを感じることもだろう！」

「では、あたしに何を感じさせようというのです」

「それは、妻というものの道だ、妻というものの運命だ！ よく
考えて置けッ」

夫はそういうと、コトンコトンと跫音をさせながら、この天井
裏を出ていった。

それから天井裏の、奇妙な生活が始まった。あたしは、メリケ

ン粉袋こぶくろのような身体を同じとこよこたろに横えたまま、ただ夫がするのを待つより外なかつた。三度三度の食事は、約束どおり夫が持つて来て、口の中に入れてくれた。あたしは、両手のないのを幸福と思うようになった。手がないばかりに、鼻が二つあり、おまけに唇が四枚もある醜怪な自分の顔を触らずに済んだ。

用を達すのにも困ると思つたが、それは医学にたけた夫が極めて始末のよいものを考えて呉れたようだった。その代り、或る日、注射針を咽喉のあたりに刺し透とおされたと思つたら、それつきり大きな声が出なくなつた。前とは似ても似つかぬ皺しわがれた声が、ほんの申し訳に、喉の奥から出るというに過ぎなかつた。なにをされても、俘囚ふしゅうの身には反抗すべき手段がなかつた。

鼻と唇とを殺そがれた松永は、それから後どうなったか、氣のついたときには、例の天井の穴からは見えなくなった。見えるのは、相変らず気味の悪い屍体や、バラバラの手足や、壘びんづ漬けになった臓器の中に埋うずもれて、なにかしらせつせとメスを動かしている夫の仕事振りだった。その仕事振りを、毎日朝から夜まで、あたしは天井裏から、眺めて暮した。

「なんて、熱心な研究者だろう！」

不ふ図と、そんなことを思ってみて、後で慌てて取り消した。そろそろ夫の術中に入りかけたと氣が付いたからである。「妻の道、妻の運命」——と夫は云ったが、なにをあたしに知らしめようというのだろう。

しかし遂ついに、そのことがハッキリあたしに判る日がやって来た。それから十日も経った或る日、もう暁の微光びこうが、窓からさしこんで来ようという夜明け頃だった。警官を交まじえた一隊の検察係員が、風の如く、真下ましたの部屋に忍びこんで来た。あたしは、刑事たちが、盛んに家探やさがしをしているのを認めた。解剖室からすこし離れたところに、麻雀卓マージャンたくをすこし高くしたようなものがあつて、その上に寒餅かんもちを漬つけるのに良さそうな壺つぼが載せてあつた。

「こんなものがある！」

「なんだろう。……オツ、明かないぞ」

捜査隊員はその壺を見つけて、グルリと取巻いた。床の上にならして、開けようとするが、見掛けによらず、蓋がきつく閉まっ

ていて、なかなか開かない。

「そんな壺なんか、後廻しにし給え」と部長らしいのが云った。

刑事たちは、その言葉を聞いて、また四方しほうに散った。壺は床の上に抛ほうり出されたままだった。

「どうも見つからん。これア犯人は逃げたのですぜ」

彼等はたしかにあたしたち夫婦を探しているものらしい。あたしは何とかして、此処ここにいることを知らせたかったが、重い鎖につながれた俘囚は天井裏の鼠ほどの音も出すことが出来なかつた。そのうちに一行は見る見るうちに室を出て行って、あとはヒツツり閑かんとして機会は逃げてしまったのだ。

それにしても、夫は何処に行ったのだろうか。

「オヤ、なんだろう？」あたしはそのとき、下の部屋に、なにか物の蠢うごめく気配を感じた。

と、いきなりカタカタと、揺れゆだしたものがあつた。

「あッ。壺だ！」

テーブル

卓子の上から、床の上に下ろされた壺が、まるで中に生きものが入っているかのように、さも焦しれたそうに揺れている。何か、入っているのだろうか。入っているとすると、猫か、小犬か、それとも椰子蟹やしかにでもあろうか。いよいよこの家は、化物屋敷になつたと思ひ、カタカタ揺り動く壺を、楽しく眺め暮した。なにしろ、それは近頃にない珍らしい活動かつどうおもちゃ玩具おもちゃだつたから。その日も暮れて、また次の日になつた。壺は少し勢いきおいげんを減じたと思われ

たが、それでも昨日と同じ様に、ときどきカタカタと滑稽こっけいな身振ぶりで揺らいだ。

夫はもう帰って来そうなものと思われるのに、どうしたものか、なかなか姿を見せなかった。あたしはお腹なかが空いて、たまたまなくなった。もう自分の身体のことにも気にならなくなった。ただ一杯のスープに、あたしの焦しょう燥そうが集った。

四日目、五日目。あたしはもう頭をあげる力もない。壺はもう全く動かない。そうして遂に七日目が来た。時間のことは判らないが、不図ふと下の部屋がカタカタする音に気がついて例の覗のぞき穴から見下ろすと、この前に来たように一隊の警官隊が集っていた。その中でこの前に見かけなかったような一人のキビキビした背広

の男が一同の前になにか云っていた。

「……博士は、絶対に、この部屋から出ていません。私はこの前に一緒に来ればよかったと思います。多分もう手遅れになったよ
うな気がします。あの××銀行の、入口の嚴重に閉った金庫室へ
忍びこんだのもたしかに博士だったのです。そういうと変に思わ
れるでしょうが、実は博士は僅か十五センチの直径の送風パイプ
の中から、あの部屋に侵入したのです」

「それア理窟に合わないよ、帆村君ほむら」と部長らしいのが横合から
叫んだ。「あの大きな博士の身体が、あんな細いパイプの中に入
るなどと考えるのは、滑稽すぎて言葉がない」

「ではいまその滑稽をお取消し願うために、博士の身体を皆さん

の前にお目にかけましょう」

「ナニ博士の在所ありかが判っているのか。一体どこに居るのだ」

「この中ですよ」

帆村は腰を曲げて、足許の壺つぼを指した。警官たちは、あまりの馬鹿馬鹿しさに、ドツと声をあげて笑った。

帆村は別に怒りもせず、壺に手をかけて、逆にしたり、蓋をいじったりしていたが、やがて、恭うやうや々しく壺に一礼をすると、手にしていた大きいハンマーで、ポカリと壺の胴どうなか中を叩き割った。中からは黄色い枕のようなものがゴロリと転りころが出した。

「これが我が国外科の最高権威、室戸博士の餓死屍体がししたいです！」

あまりのことに、人々は思わず顔を背けたそむ。なんとという人体だ。

顔は一方から殺そいだようになり、肩には僅かに骨の一部が隆起し、胸は左半分だけ、腹は臍へその上あたりで切れている。手も足も全く見えない。人形の壊れたのにも、こんなにまで無惨むざんな姿をしたものは無いだろう。

「みなさん。これは博士の論文にある人間の最小整理形さいししょうせいりけいたい体です。つまり二つある肺は一つにし、胃袋は取り去つて腸ちように接ぐという風に、極度の肉体整理を行ったものです。こうすれば、頭脳は普通の人間の二十倍もの働きをすることになるそうで、博士はその研究を自らの肉体に試こころみられたのです」

人々は啞然あぜんとして、帆村の話に聞き入った。

「この壺は博士のベッドだったんです。その整理形体に最も適し

たベッドだったんです。ところで、こんな身体で、どうして博士は往来を闊歩かつぽされたか。いまその手足をごらんに入れましょう」

帆村は立って、壺の載っていた卓子テーブルの上に行った。そして台の中央部をしきりに探していたが、やがて指をもつて上からグツと押した。するとギーツという物音がすると思うと、卓子の中からニヨキりと二本の腕と二本の脚が飛び出した。それは空間に、博士の両腕と両脚とを形づくってみせた。

「ごらんなさい。あの壺の蓋が明いて、博士の身体がバネ仕掛じかけで、この辺の高さまで飛び出して来たとする、電磁石の働きで、この人造手足がピタリと嵌はまめるのです。しかしこの動作は、博士が壺の底に明いている穴から、卓子テーブルの上の隠し釦ボタンを押さねばなり

ません。押さなければ、この壺の蓋も明きません。博士が餓死をされたのは、睡っているうちにこの壺が卓テーブル子の上から下ろされた結果です」

一座は苦しそうに揺ゆいだ。

「しかし博士は、何かの原因で精神が錯乱せられた。そしてあの兇きようこう行を演じたのです。小さいパイプの中を抜けることは、その手足を一時バラバラに外し、一旦向う側へ抜けた上、また元のように組立てれば、苦もなく出来ることです。それを考えないと、あの金庫の部屋に忍びこんだことが信ぜられない。これで私の説が滑稽でないことがお判りでしょう」

やがて帆村は一同うながを促して退場をすすめた。

「あの夫人はどうしたろう？」

と部長が、あたしのことを思い出した。

「魚子夫人はアルプスの山さんちゆう中に締め殺してであると博士の日記に出ています。さあ、これからアルプスへ急ぐのです」

人々はゾロゾロと室を出ていった。

「待って！」

あたしは力一杯に叫んだ。しかしその声は彼等の耳に達しなかった。ああ、馬鹿、馬鹿！ 帆村探偵のお馬鹿さん！ ここにあたしが繋がつながれているのが判らないのかい。夫は、あの井戸の蓋の穴から逃げ出したのだ。呪のろいの大石塊だいせつかいは、彼に命中しなかったのだ。ああ今は、あたしには餓死だけが待っている。お馬鹿さん

が引返して来る頃には、あたしはもう此の世のものじゃ無い。夫
 が死ねば、妻もまた自然に死ぬ！ 夫の放言ほうげんが今死に臨のぞんで、
 始めて合点がてんがいった。夫はいつか、こんなことの起るのを予期よき
 していたのか知れない。あたしもここで、潔いさぎよく死を祝福しましょう
 !

青空文庫情報

底本：「海野十三全集第2巻・俘囚」三一書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1934（昭和9）年2月号

入力：田浦亜矢子

校正：もりみつじゅんじ

2000年1月10日公開

2011年2月24日修正

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書

館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

俘囚

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>